ラマ塔の秘密

宮原晃一郎

青空文庫

一　白馬の姫君

「ニナール、ちよつとお待ち」と、お父様のキャラ侯がよびとめました。ニナール姫は金銀の糸で、ぬひとりした、まつ赤な支那服をきて、ブレツといふ名のついたまつ白な馬にのつて、今出かけようとするところでした。

「なんですの、お父様」と、ニナール姫はふりかへりました。

まだ十五になつたばかりですから、顔はほんの子供ですけれど、身体はなか〳〵大きくて、まるで大人のやうでした。

「今日は、お前、ジウラをつれて、山へあそびに出かけるはずだつたぢやないか。それだのにどうして、ひとりで、馬にのつて出かけるの」

ニナール姫は、赤い花が咲いたやうにパツと朗らかに笑つて、金の拍車をチャラ〳〵と鳴らしました。

「だつてお父様、ジウラさんは男のくせに、お馬にのることが下手で、落ちるのが恐いからいやですつて行かうといひませんもの」

キャラ侯は八の字を額によせました。

「フム、蒙古の王子が馬にのることが下手では困つたものだね。よし〳〵、わしに考へがあるから、ぢや、今日はお前ひとりで行つてもよろしい。だが近頃、馬賊がこのへんの山にはいつて来たといふことだから、よく気をつけなさいよ」

「大丈夫よ。ブレツに一むちあてれば、馬賊なんか追ひ付きつこありやしませんわ」

ニナール姫は、さういふが早いか、足で一つ、ブレツのお腹をポンとけると、矢のやうに、向ふに高くそびえるギンガン嶺の方をさして、走せ去りました。

ニナール姫はこのギンガン嶺の麓に、お城をかまへてゐる、満洲貴族の一人子でした。お母様は蒙古の王様からお嫁に来てゐらつしたのですが、さき程、病気でお亡くなりになりました。お父様のアイチャンキャラ侯は、たつたひとりぽつちのニナール姫が、淋しいだらうと、従兄に当るジウラ王子を蒙古から呼びよせ、そのお相手になさつたのです。ジウラ王子は蒙古の王様のうちでも、成吉斯汗のすゑだとよばれる名家の子でした。が、不幸にして早く、お父様になくなられ、それから又、近頃、お母様も死んで、孤児になつてゐました。だから、キャラ侯は王子の為にもよからうと思つたのです。

ところが、ジウラ王子は年こそニナール姫よりも一つ上でしたけれど、身体もやせて、小さく、青い顔をして、いつも隅の方へ引つ込み、だまつてばかりゐるのでした。しかも、そのくせ、ゐばりやさんで、どうかすると「おれは蒙古の王子だぞ」といふやうに、高慢な顔をしますから、大勢の召使ひたちから、軽蔑されたり、いやがられたりするだけで、一向、ニナール姫のさびしさを慰める役にはたちません。

尤も、ニナール姫の方だけでは、ジウラ王子がゐやうがゐまいが、そんなことはどうでもいゝので、以前とかはりなく、朗らかで、活潑で、勇ましい男もかなはないほど大胆で、馬に乗り、鉄砲をうち、せい一ぱいにあばれてをりました。

然し、うはべはさうでも、やはり女のことですから、心の底では、

亡くなつたお母様のやさしい言葉や、美しかつた姿を、始終思ひ出して、人知れず涙をながすことがありました。つまり、烈しい運動や、勇ましい武術をするのも、それに心をまぎらして、こんな悲しい思ひを、なるべく、少なくしようといふのでした。

二　ラマ塔の燈火

それから一週間ほど経つた、美しい、晴れた夜でした。ニナール姫と、ジウラ王子とは、お城の庭に出て、新鮮な空気を吸つてゐました。このあたりは、満洲でも、ずつと北によつてゐるので、夏は日のくれるのが、大へんおそいので、人はよく夜ふかしをするのでした。

バラに似た花の香りがして、時鳥のやうな鳥の声が聞えました。と、お城の広間の時計が、地の底まで沈むやうな深い音をたゝて、ヂーン〳〵と十一時を打ちました。この時計はずつと昔、支那がまだ清国といつた頃、北京の宮城の万寿山の御殿にかけてあつたもので、その頃、皇帝よりも勢ひをもつた西太后（皇太后）の御機嫌とりに、外国から贈つたものを、ニナール姫のお祖父様がいたゞいたものでした。

時計が、十一時を打ちきつたとき、ジウラ王子はどうしたのか、俄にニナール姫の腕にすがりつくやうにして、恐ろしさうに、さゝやきました。

「ニナール、あれ何、何んの光？」

ジウラ王子の指は、向ふに、怪物のやうに、黒々と聳えてゐる、ラマ塔をさしてゐました。

まつたく、平生、人のゐないラマ塔の下の階から、小さな火の光りがちらちらと見えました。ふつと消えたかと思へば、また黄色く光り出して、丁度草の中の螢かなぞのやうでした。

それを見ると、ニナール姫も、胸がドキ〳〵しました。

ラマ塔は昔、このお城がラマ仏教のお寺であつたとき、建つた、ずゐぶん古るいものですが、アイチャンキャラ侯の先祖が、これを取つてからのち、或時、外敵にせめられて、一時これを占領されたことがありました。そのとき、タクマールといふ勇敢な娘が、僅か十八歳の身で、その年下の弟や妹たちを助けて、この塔に立てこもり、最後まで敵と戦つて、とう〳〵切り死にしました。それでラマ塔には、タクマールの幽霊が出るといふ噂があつて誰もそばへは寄らないのでした。

「さうね。タクマールの幽霊がでるといふから、さうかも知れないわ。ジウラさん、ひとつ、行つて、正体を見届けちやどう」と、ニナール姫は笑ひながら言ひました。

「いやだ！　僕、こわい。もう内へ帰つて、ねませう。おそいぢやないの、今夜は！」

ジウラ王子はさういふと、もう立ち上がつて、家へ帰りかけました。すると、ニナール姫は、からかつてやりたい気持が一そう加はつて、ジウラ王子を捕へて放しません。

「何んですね、将来、蒙古の王様になる人が、そんないくぢなしで、どうしますか。さあ、私が、あの入口まで送つてあげますから、一つ探見していらつしやい」

「いやだ〳〵、僕、こわい。」

ジウラ王子はなか〳〵行かうとはしません。けれども、ニナール姫は、お父様が、さきに言つたことを想出してゐたので、むりにジウラ王子をひきずるやうにして、黒いラマ塔のところへつれて行つたのでした。ニナール姫がさうしたのは、丁度、その日、お父様が、ジウラ王子の胆をねるために、ひとりで、あの幽霊塔に行かしてみようと言はれたのを、おぼえてゐたからでした。だから、そのあかりも、或はお父様のいひつけで、誰かゞとぼしてゐるかも知れないと、そんなふうにも思つたのです。

ラマ塔はぢきそこにあるやうでしたが、実は雑木の小さな森を通つて、谷のふちへ出て、それからそこにある橋をわたつて、小さな山のふもとまで、三百メートルも行かなければならないのでした。塔の上には、青黒い空に、星がきら〳〵と光つてゐました。

「さあ、これから先きはジウラさんひとりで行くのよ」と、ニナール姫は言ひました。「あの塔の光りが何んだか、見届けていらつしやい。もし悪る者でもゐたら、これで打つておしまひなさい」

ニナール姫は闇にも光るピストルを、ふるへてゐるジウラ王子の手に渡しました。

「私、こゝで待つてゐますからね。勇気をふるつて行くんですよ」

けれどもジウラ王子はまだぐづ〳〵してゐるので、ニナール姫は、その背をポンと一つつきました。ジウラ王子はフラ〳〵と仆れさうな足取りで、高くしげつた夏草の中を、がさ〳〵と分けて行きました。そして間もなくすぐ目の前に小山のやうにそびえ立つ、まつ黒なラマ塔は、小さなジウラ王子の姿を呑んでしまひました。

三　悪事の相談

それから十五六分も経ちましたらうか。ニナール姫も、さすがに心配しながら、ジウラ王子が無事で早く帰つてくるやうに祈つてをりましたが、どうしたことか、待てども待てども帰つて来ません。ニナール姫は心配で、もうぢつとしてゐられなくなりました。で、自分も、ラマ塔をめざして行きました。一足々々、ジウラ王子が、そこに仆れてはゐないかと、危ぶみながら進みました。

いよ〳〵ラマ塔の入口に来ると、さすがに勇気のある姫もちよつと躊躇しました。といふのは塔の根のところは、なか〳〵宏大なもので、その入口はお城の門ほど高くて、広くて、しかも、すばらしく大きな、仁王様のやうな石像が、門の両側の柱や、壁に立つてゐるので、勇気のあるニナール姫でもぞつとするほど恐いのですから、ジウラ王子のやうな弱い人は、とても、その前を通れやうはずがない。或はこゝらで気絶してゐはしなからうかと、思ひながら、あたりをよく見まはしても、そんなふうもないので、ニナール姫は断然、塔の中へはいりました。ひやりとした空気が顔をなで、黴つ臭いにほひが鼻をうちました。然し、何分、まつくらなので、足元があぶないからちよつと立ちすくんでゐましたが、フト前の方に、かすかに燈が見えて来ました。

「あゝ、やつぱりお父様が、誰かにいひつけて、燈火をおつけさせになつたんだわ。ジウラさんも、きつと、あすこにゐるでせう」

ニナール姫は、足元をさぐり〳〵、そつと奥へすゝみました。すると、二三人の男の声で、何やら話してゐるのが聞えました。それ

がこゝらへんの言葉でないらしいので、賢い姫ははて、変だと感づいて、いよ〳〵そつと進んで行きますと、燈明は塔の北側の部屋からもれてくることが分りました。そつと忍寄つてのぞくと、その中には、三人の、馬賊らしい、鬚モジャの男たちが、あぐらをかいて、坐つてゐました。そのうちの二人だけは入口に向かつて坐り、そばに馬の鞍やら、馬具の類やら、宝石をちりばめた短剣やら、美しい手箱などが置いてありました。

「もう少し負けねえか」

と、そのうちの一人が、こちらへ後ろを向けてゐる男に言ひました。

「一銭も負からねえ」とこつちの男が、答へました。それが土地の言葉である上、何んだか声にも聞き覚えがあるやうでした。

「考えて見ろ。ブレツといや、キャラ侯の厩のうちばかりでねえ、北満洲、蒙古きつての名馬だぞ」

「さう云や、さうだが——すると、馬を渡すのはいつだい」

「明日、渡してやる」

「間違ひないな。それぢや、手附金五十両やつて置く」

長い赤鬚の馬賊は、ピカ〳〵光つた銀貨をかぞへて、そこに出しました。それを、こつちへ後ろを向けてゐる男が、受取る拍子に、ふとその横顔を見せました。

「あツ！」

ニナール姫は思はず、小さな驚きの声をあげました。それはニナール姫の馬の世話をしてゐる馬丁のアルライだつたからです。

アルライはニナール姫の小さな叫びをきゝつけて、すぐに戸を開けて、炬火をつけました。けれども、ニナール姫はすばやく、隅の方の壁にピタリと身を押し付けましたから、見付かりませんでした。

「何んだい」と、馬賊の一人が声をかけました。

「何んだか声がしたので、又誰か来やがつたと思つたんだが、空耳だつた」

と、アルライが答へました。すると、赤鬚の馬賊が、

「あの餓鬼はどうするんだ」と、訊きました。

「あすこに投り込んどきや、鼠の餌になるか、飢ゑ死にするか、どつちみちおれの秘密がもれることはない。おれも、ブレツをお前たちに渡しや、もう仕事もないから、いゝ加減、見切りをつけて、此の城を立退くんだ」

「だが、只、くたばらせるのは惜しいな。どうだ人質にして、五十でも百でも金にするからおれに売らねえか」と、その馬賊が言ひました。

「うん、そいつはいゝ考へだ。ぢや、いくらに買ふ？」

「五両ぢやどうだ」

アルライはせゝら笑つて

「そんな金ぢあ渡せねえよ、あれでも未来は蒙古は伽什爾の王様になるのだぜ、やがては大蒙古の王様だ。それを人質にとるんだ。どんなに安くつもつても、万両の価はあるんだぞ」

「まあ話は半分と聞いて置かう。とにかく、いくらなら手放す」

「千両といひたいが、うんとまけて百両」

「高い〳〵五十両にしとけ！」

「さうはならねえ。いやなら止せ」

ニナール姫はこの話を聞いて歯ぎしりしました。悪馬丁のアルライはニナール姫の愛馬ブレツを盗み出して、馬賊に売る約束した上、うつかり塔に入つたジウラ王子をつかまへて人質として売らうとし

てゐるのでした。

「あゝ、ジウラさんに、あのピストルを渡してゐなかつたなら、アルライも二人の馬賊も、すぐ射殺して、ジウラさんを助けてあげられるのに」

ニナール姫は、思はず懐をさぐると、短剣の柄に手がふれました。「タクマールがしたやうに、入口に待受けて、一人づつ、これで胸を刺してやらうか」と、思ひました。けれども、相手は大の男が三人で、こちらは小さな女の児一人です。やりそこなつたら、それこそ大へんです。勇気ばかりでなく、智恵もすぐれてゐるニナール姫は、そんな危ぶないことをする代りに、別に安全な方法を考へ出して、アルライや、馬賊たちのすることをこつそりと見てゐました。

悪者どもはさうとも知らず、ジウラ王子の値段を押問答してゐましたが、とう〳〵五十両で約束がきまつて、アルライはそのお金を受取り、馬賊の一人はあとに残つて、番をし、他の一人は、外の仲間をつれて来て、此処で買つた品物やら、ジウラ王子やらを受取つて行くことにきまりました。

四　不敵の馬丁

ニナール姫はアルライと一人の馬賊とが塔から出て行つたあとで、自分もこつそりと、塔を出て、走つてお城へ帰りました。

お城ではニナール姫と、ジウラ王子との姿が見えなくなつたといふので、大騒ぎをしてゐるところだつたので、ニナール姫がひよつこりと帰つてくると、お父様は大悦びで

「まあ、ニナール？」と、たしなめるやうに言ひました。「お前はこの夜中、何処へ行つたの。心配させるぢやないか。お転婆もいゝ加減にするものだよ。そしてジウラは何処に、」

ニナール姫はわざと落着いて、

「お父様、それについて大事なお話がありますの。ちよつと、お広間へ来てちやうだい」お広間へ来ると、ニナール姫は声をひそめて

「あのね、とても大へんなことよ」

「何が大へんなのかい。」

「ジウラさんが、馬賊にさらはれるところよ」

「えッ、何をいふ」

「それに私のブレツも盗みだして、明日は売られてしまふところよ」

「誰が売るのか」

「アルライが」

「お前、どうかしてゐやしないか」

「いゝえ」と、いつて、ニナール姫は今までの話を手短かにしました。するとキャラ侯はかん〳〵に怒つて、すぐアルライをよばうとしましたが、ニナール姫はとめました。

「まづ塔に兵隊をやつて、内からも外からも、馬賊が出入りのならぬやうにして下さい。それも中の馬賊に知られると、ジウラさんを殺すやうなことになるといけませんから、ジウラさんは、あとで、私たちがいつて、うまく、けいりやくで、内の馬賊を押へて置いて、それから助け出しませう。それよりもさきに、此処へ、守備隊長をよんで、このことを話して兵隊を二三人つれて来させ、それから厩頭のウラップに、アルライを此処へつれて来るやうに言付けて下さい」

ニナール姫の手配はまるで、りつぱな警察署長のやうに、よく行きとゞいたものでした。で、お父様もすつかり感心して、そのいふとほりにしました。

アルライは、まさか自分の悪事がつゝぬけに御主人の耳にはいつてゐるとは知りませんが、たつた今、悪るいことをして、帰つて来たばかりのところへ、こんな夜更けによび出されるのを不審に思つた、不安心な様子でした。

アイチャンキャラ侯はアルライが広間へはいつてくると、眉をつり上げて雷のやうな声で叱りつけました。

「貴様はふらちな奴だ。主人の馬を馬賊に売る約束をしたり、ジウラをかどわかして、人質にやらうとしたり、悪いことばかりをしてゐるな、こちらには一々分つとるぞ！」

アルライはさすがに驚いて顔の色を変へました。でも飽くまでづう〳〵しく、にや〳〵笑ひながら

「何をおつしやるんです。そんな馬鹿げたことを！　誰か私をねたむものが言つたことでせう」

「馬鹿およし」と、わきから、ニナール姫が言ひました。「わたし、お前たちが塔のなかでしてゐたことや、言つてたことを見たり、聞いたりしてゐたんですよ」

「へへへ、お姫様は夢を見ていらつしやるんでせう」

アルライはさう言ひながら、戸口の方へそろ〳〵と歩るいて行きました。

「黙れ！」と、どなつたキャラ侯は、いきなり壁から鞭をとり下ろして、ピシリ〳〵と、二度、アルライの頭を打ちました。

「畜生！」と、アルライが叫んだかと思ふと、ぴかりと何やらその手に光りました。かくしてゐた短剣をぬいたのでした。そしてキャラ侯にとびかゝりました。

「どつこい、さうは問屋で下ろさない」と、後ろから、ウラップがその手をしつかりと押へつけました。

「ハヽハヽ、じたばたするない。手前は鷲でもまだ羽の生えそろはない子供だ。そんな大それた真似をするのは、早いぞ！」

アルライはまつかな顔をして、一生懸命にその手をもぎ放さうとしましたが、なか〳〵放れません。その額には、今打たれた鞭の痕が、醜くついてゐました。

その途端、戸が開いて、守備隊長が、二人の兵をつれて、はいつて来ました。それを見ると、アルライはありつたけの力を出してウラップの手をふりきつて、みんながアツといふ間に、窓にとびのり、すぐその張り出しの上に、すつくと立ちました。下は、二十メートルばかりの高い断崖で、その下は底知れぬ深い淵です。けれども大胆不敵のアルライは、こつちを見返つて、そのきら〳〵する短剣をふりまはし、

「親も子も、よく覚えてをれ。アルライ様の仕返しが、どんなに恐ろしいかつてことを！」

守備隊長はすぐ腰のサツクから、短銃を取り出しました。が、ドンといふ物凄い音がその手から起つた瞬間には、アルライの姿はもう深い淵へザンブととび込んでゐました。

「ちえツ！　遁がしたか。まさか、あんなところから飛び込みはしないと思つたのは、油断だ。しかし、流れが早いから、助かりやしまい」

守備隊長は自分で自分を慰めて、それからキャラ侯に向つて、

「閣下、鞭など使はずに、あんな悪魔は、すぐ首を叩つきつておしまひなされば、ようございましたのに！」

「いや〳〵、あんな者を切つちや、刀の汚れだ」

と、侯は言ひながら、鞭を二つにへし折つて、別々になげすてました。

五　袋の鼠

塔の中では馬賊が一人、番に残つてゐました。首領が二三人手下をつれて迎へにくるのを待つてゐるのでした。

すると、少時たつて、外で、何やら人のけはひがしたやうで、草やぶの鳴る音も聞えたやうでした。

「ハテな、迎へに来たのにしちや、少し早いぞ」と、馬賊は首を傾げました。

「ことによつたら、あの子供をお城の者がさがしにでも来たかしら」

馬賊は目じるしにならないやうに、急いであかりを吹き消しました。このときは、実はニナール姫の指図で、武装兵がこつそりと塔を囲んだときでした。

それから、またしばらくして、今度は、はつきり二三人の足音が聞えました。

「来た〳〵、いよ〳〵親分が来た」

馬賊は悦んで、また燈火をつけました。そして「親分ですか」と低い声で訊いてみました。そのときには、足音はもう、ごく近くに来てゐました。

「うん、待たせたね」と、闇の中で、太い声が答へました。それは変でしたけれど、中の馬賊は気がつきませんでした。

「ちよつと、入口まで出てくれ」と、その声は言ひました。

「ヘイ〳〵。あの人質もつれて行きますか」

「いや、お前だけでいゝ」

賊は火のついた蝋燭を手にもつて、戸口を一歩踏み出すと、忽ち、何者にか足をさらはれて、バツタリとそこに仆れました。

そのとき、懐中電気の光りが、まばゆく目をいました。そして、しまつたと思つたときには、もうきり〳〵と、後ろ手にしばり上げられてゐました。

「ハハハ、うまくつり出されたな。斯うして置けば、ジウラ殿下はもう大丈夫です」と、守備隊長が言ひました。「いや、どうもニナール姫さまの、何から何までお気づかれるのには、恐ろしいくらゐでございます。外の方も網が張つてありますから、馬賊がくれば、すぐ捕へます」

その言葉が終るか終らぬうちに、塔の外で、烈しい銃声が起つて、人の叫びのゝしる声や、走り廻はる足音がしました。それからまた二三発銃声がして、それがやむと、塔をさして、四五人の黒い人影が走つて来ました。

「誰か！」

守備隊長は入口に出て、どなりました。

「味方！」と、声がしました。つゞいて「隊長殿。賊は抵抗するので、みんな射殺しました」と、言ひました。

「よろしい。此処で取押へた奴を城へ曳いて行け。あとでしらべるから」

六　仏像のからくり

ニナール姫は懐中電気をつけ、まつ先きに立つて、先程、アルライや馬賊たちが、悪事の取引きをしてゐた部屋に入りました。けれども、ジウラ王子の姿は見えません。王子どころか、生きたものは、鼠一疋もゐません。そして可なり広い室の向ふの壁に、たゞ大きなラマ仏の木像が三つ立つてゐるつきりでした。

「おや、ジウラ殿下はお見えになりませんね」と、守備隊長が、失望したやうに言ひました。

「うん、ゐないね。どうしたのだらう」と、キャラ侯も心配さうに言ひました。「ニナールの見ちがひぢやないかね」

「いゝえ、悪者どもは、たしかに此の部屋にゐました。見違ひぢやありませんね。もつとも、ジウラさんの姿は見やしないんですが、どこかにかくしてあるやうに、アルライが言つてゐましたから、さがしてみませう」

「でも、隠すところがないぢやないか。別な部屋に押しこめてあるんだらう」

「いや、一時押へて置くのにまつ暗な別な部屋へ、わざ〳〵面倒な思ひをして、入れに行く筈がありませんわ。きつと、この部屋に、何か秘密の戸口があるのよ。あたし呼んでみませう――ジウラさん、ジウラさん！」

ニナール姫はしきりに呼んでみますけれど、何んの答へもありません。只井戸の中で物を言つてゐるやうに、高い天井に反響するつきりでした。

みんなは懐中電気やら、炬火やら、蝋燭やらを壁だの天井だのにさしつけて、秘密の出入口でもありはしないかと、しきりにさがしましたけれど、一向それらしいものが見当りません。でみんな困つてゐました。

と、そのとき、ニナール姫が、突然叫びました。

「分つたわ。あれよ！　あすこよ！」

姫の指は牀をさしてゐました。そこには二三寸も高く積つた埃の上に、大きな支那靴の跡がポタリ〳〵とついて、ラマ仏像の横の方へ走つてゐました。

「あの仏像が怪しいわ！」

ニナール姫は、向つて右端の仏像をゆびさしながら、その足跡をつけて行きました。

「怪しいといつて、この仏像の中にでも、ジウラがかくしてあるといふのかい」と、キャラ侯もニナール姫について行つて、その仏像を見上げました。

そこへ、守備隊長が来て、仏像の台坐のまはりを、手で押してみたり、叩いてみたりしましたが、ビクともしません。

「どうも、お姫様、今度はお考へがちがつたやうですね」

「いゝえ」と、ニナール姫は強く首を横に振りました。「間違ひありません。ほら、この仏像を外のと比らべて御覧なさい。一目で、ちがつてゐることが分りませう」

然し、隊長の目にも、キャラ侯の目にも、それは、外のと同じ、奇怪な、醜い、恐ろしいやうなラマ仏でしかありませんでした。

「分りませんか。これを御覧なさい」と、ニナール姫は仏像の膝の

あたりから、台坐の下まで、なで下ろすやうな手附をしました。

「それね、あすこだけ埃がとれて、縞になつてゐるでせう。他の仏像は埃を一めんにかぶつて、そんな縞がないぢやないの。だから、この仏像には人がさはつた証拠よ」

「やあ、すつかり感心しました」と、守備隊長は頭を下げました。

「お姫様のお目はするどいですなあ」

「なるほど、ニナール、お前はえらい。だが、仏像のどこにジウラがかくしてあるのかい」

「さあ、仏像の中か、どこか分りません。でも、あの縞が終つてゐるお腹の横に光つた小さな石が見えるでせう。多分、あれを押すと、どこか秘密の戸口があくんぢやないか知らと思ひますわ。お母様が、ラマ仏には、そんな仕掛のしたのがあるつて、お話をなさつたことをおぼえてゐますもの」

守備隊長はすぐ仏像の台坐にのり、その光つた石を押すと、ぎつと音がして、仏像は前の方へ動き出して、あとには人のはいれるやうな穴が一つ、牀にあきました。

「ジウラさん！」と、叫びながら、ニナール姫はその穴に電気をさしこみのぞきました。「ジウラさん、しつかりなさいよ！　私達、助けに来たのよ！」

ジウラ王子は、穴の中に、ぐつたりとなつて、仆れてゐましたので、守備隊長がすぐそれを抱き上げて、牀の上にねかすと、ニナール姫はその口に手を当てがつて、息があるかを確めてみながら、

「ジウラさん、ジウラさん、しつかりしてよ！　あたしよ、ニナールよ！」

と、心配さうに叫びました。けれども、ジウラ王子は目も開けなければ、動きもしません。勇敢で賢いニナール姫も、やつぱり少女です。かうなると、もう泣声になつて、

「お父様、どうしませう。ジウラさんがこのまゝ死にでもしたら、あたしが殺したやうなものですわ。どうかして頂戴よ。早く〳〵」

「いや、ジウラを死なしちや、お前ばかりか、わしの責任ぢや。早く城へつれて行つて、松本先生に手当をして貰はなけりや」

ジウラ王子はすぐお城へ運ばれ、侯の侍医をしてゐる日本人の松本氏に診察して貰ひました。別にどうしたといふわけでもなく、只驚きの余り気絶してゐたのでしたから、間もなく息を吹き返しました。

枕元にすわつて、心配してゐたニナール姫はやつと安心しましたが、それでも、目には涙をためて、言ひました。

「ジウラさん、御免なさいね。もう、肝ためしだなんて、あんな危ない目に貴方を、あはしませんわ。あたし本当に馬鹿だつたのねえ。でも、貴方、これから強く〳〵なつて、成吉斯汗のやうな英雄になつて下さいね」

ジウラ王子はその痩せて、あを白い顔に熱心の紅味をあらはして、うなづきました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻　楠山正雄　沖野岩三郎　宮原晃一郎集」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
入力：鈴木厚司
校正：noriko saito
2004年8月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ラマ塔の秘密

宮原晃一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/